

親から子への「告知」

——出生コホート研究に参加する親の認識と語り方の考察——

○東京大学大学院／日本学術振興会 李怡然
東京大学 武藤香織

1 目的

親から子へ出自にまつわる事実を「告知」(telling)するという行為は、生殖補助医療や養子縁組において、当事者家族や研究者にとって重要視されてきた。特に、情報提供(inform)だけでなく、子の成長段階に応じて、親が絵本を使ってストーリーを語る、といった子へのはたらきかけが実践として提唱されている(Montuschi 2006)。このような取り組みは、語りを通じて子のアイデンティティを形成し、結果として親子の信頼関係の構築に寄与する行為として期待されている。ここでは、「告知」概念が、伝える／伝えないかの選択だけでなく、親が子に何を、どう語ろうとするのか、という分析に踏み込む枠組みとして有効であることに着目したい。

そこで、本報告では、妊娠中に親の代諾により、子が十数年という長期にわたって参加する出生コホート研究を取り上げる。出生コホート研究では、子の成長の過程で、子が親から研究参加を代諾した事実に関して知らされるプロセスがあると想定できる。これは、親がどのような認識のもと、子に何を語るのか、という「告知」のプロセスを解明する上で、一つの興味深い事例と言えよう。

本報告では、環境省主導による全国約10万人の子を胎児期から13歳まで追跡する出生コホート研究「子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)」(2011-)を事例とし、参加児の母親・父親の子への告知の態度とその背景を考察することを目的とする。

2 方法

エコチル調査への参加コホートのひとつである、「エコチルやまなし」を調査対象とし、2015年8月22日、23日に市民イベントのエコチル調査参加者向けコーナーにて母親44名／父親23名に対し10分程度の構造化面接を実施し、更に同年9月から10月に母親11名、父親3名を対象に1時間～1時間半程度の半構造化面接を実施した。半構造化面接の結果は逐語録をもとに3名でコーディングを検討し分析を行った。

3 結果

告知の内容と様式として、多くの親は享受する特権意識や子自身にとっての健康上・教育上のメリットを強く認識し、(1)〈指示的告知〉(i)〈エンパワメント型〉:研究参加が「役に立つ」「社会貢献」という価値を強調し、幼少期から参加者としての肯定的なアイデンティティを付与する(ii)〈説得型〉:子の拒否につながる否定的な説明を回避し、子が嫌がる場合にも参加継続を促す、という語り方を志向していた。反対に、現時点で研究が「役に立つ」かどうか不明瞭なことや子の個人情報を提供していることを重く捉えた場合は、(2)〈非指示的告知〉:研究継続の拒否を含めて子の意向を尊重する、という態度が少数ながらも見られた。

上記のような〈指示的告知〉が多い傾向の背景として、母親の参加動機に、妊娠・出産という不安定な時期の中で研究者側から受けた体調への気遣いがあること、子の誕生後もイベントへの参加を通じて、研究者側との対面的な信頼感が強化されていたことなどが影響していると示唆された。

4 結論

〈エンパワメント型〉〈説得型〉のような語り方は、子のアイデンティティ形成に寄与する可能性があるという意味で「告知」研究に資する発見と言える。家族に関わる医療や医学研究において、伝える内容の深刻さや環境によって、告知のあり方に変化が見られるか、それが子の受け止め方や選択可能性にどのように作用するかを考察することが更なる探究課題である。

文献: Montuschi, Olivia, 2006, *Telling & Talking: 'Telling' and Talking about Donor Conception: A guide for Parents* by Olivia Montuschi, Donor Conception Network.

謝辞: 本研究の実施にあたりご尽力頂いた「エコチルやまなし」の皆様、山梨大学大学院・山縣然太郎教授、国立研究開発法人国立環境研究所・新田裕史フェロー、須田英子特別研究員に深く御礼申し上げます。